

## 隅から隅まで、ずず、ずいーっと

東江 一紀

新保教授から、「東京人中の東京人」としてバトンを託されちまい、おろおろしている都下の終身翻訳囚人です。

いや、まあ、東京都の住民となって三十年以上は経つので、東京人を名乗っても詐称とはなりませんまいが、ちょいとおこがましい。なにせ、上京するまでの二十五年間、全国の端っこばかりを経巡っていた身です。根っからの恥じっ子。

わたくし、生まれ育ったのは西の果ての長崎で、中学・高校を出たのが、当時アメリカ合衆国委任統治領だった沖縄、そのあと北海道で七年の懶惰な学生生活を送りました。

せっかくの機会なので、この履歴の中のいちばんダイナミックな部分、推理作家の皆さんの推理すら（たぶん）寄せつけない琉球列島から蝦夷地への旅について書くとしましよう。

復帰前の沖縄には、国費留学制度というのがありましてね。文部省が全島（まだ県ではない）の高校生及び浪人の中から試験で三百人ほどを選抜して、全国の国立大学に員数外の留学生として割り振るんです。

合格しても、その時点では、自分がどこの大学に配置されるかわからない。わたしなんぞ、入学ひと月前に北海道と言われ、あわてて防寒具を買いに走りましたが、亜熱帯の地でそんなもの、揃えられるはずありません。どうすりゃいいんだよ！

ま、そんな心細い思いをかかえた十八～九の若者三百名が、三月下旬、那覇港岸壁に集結するわけですわ。そして、鹿児島航路の客船の二等船室にみんなで乗り込む。日本縦断留学生ばらまきの旅の始まりです。

二日目の朝、出航して十八時間後に、船は錦江湾に入り、港の沖合で入国審査を済ませてから接岸。鹿児島大学に入学する数人は、

そこでもう寮やら下宿やらに散って、新生活を始めます。残るわれわれは鹿児島に一泊。

三日目、宮崎大学、大分大学の組は、鹿児島駅から日豊本線の列車に乗り、その他大勢は、西鹿児島駅から急行霧島（もちろん二等車）に乗ります。そして、熊本駅で熊本大学が降り、鳥栖駅で佐賀大学と長崎大学が降り、博多駅で九州大学が……と、万遍なく散って、徐々に人数が減っていく。

四日目、二十六時間の汽車の旅を終えて東京へ着き、かなりの人数が都内の大学に散ると、残りはもう五十人弱。でも、わたらの旅程はまだ半分ですわ。

五日目、急行八甲田で北へ。茨城大学が降り、東北の各大学が次々に降り……六日目の早朝、青森で青函連絡船大雪丸に乗ったのは約十人。函館から急行宗谷に乗り継いで、白銀のニセコ山中を突っ切ります。いやあ、雪景色もさることながら、二時間ほどのあいだ、人家が一軒も見えないことにびびりました。なんてところに来ちゃったんだ！

夕刻、小樽の街並みを目にして、ほっとひと息。その四十分後、宵闇の中に現われた札幌はえらい大都会に見えましたよ。ふうっ。まるまる六日間、あの時代、あの年齢だったからこそ可能なサバイバル大旅行の一席でした。

途中、山陽本線の岡山で降りて、宇高連絡船で四国に渡ったのが、琉球政府立那覇高校の同級生であるミネット・ウォルターズ記者の成川裕子さんで、本来ならこのリレー・エッセイをそちらへつなぎたいところなんですけど、自分の訳書のあとがきさえいやがって逃げ回る人なので、たぶんバトンを受け取らないでしょう。

ってことで、馬トンは馬友（じつは馬弟子）の田口俊樹兄へ。数年前、初めてふたりで府中へくり出したとき、師匠のわたしが百円ずつ馬券を買っているのに、最初っから千円単位で買いまくったという不遜の弟子です。